

西鶴と『徒然草』の関わりについて

Daniel Struve

1 はじめに

元禄八年、西鶴の逝去の一年半後に『西鶴俗つれづれ』^①という題号で第三の遺稿集が出版されました。その冒頭に兼好法師に擬した西鶴の肖像が載っています(図一)。この『西鶴俗つれづれ』の口絵は元禄三年に出版された『徒然草吟和抄』^②という注釈書の巻頭にある兼好法師の肖像に酷似しています

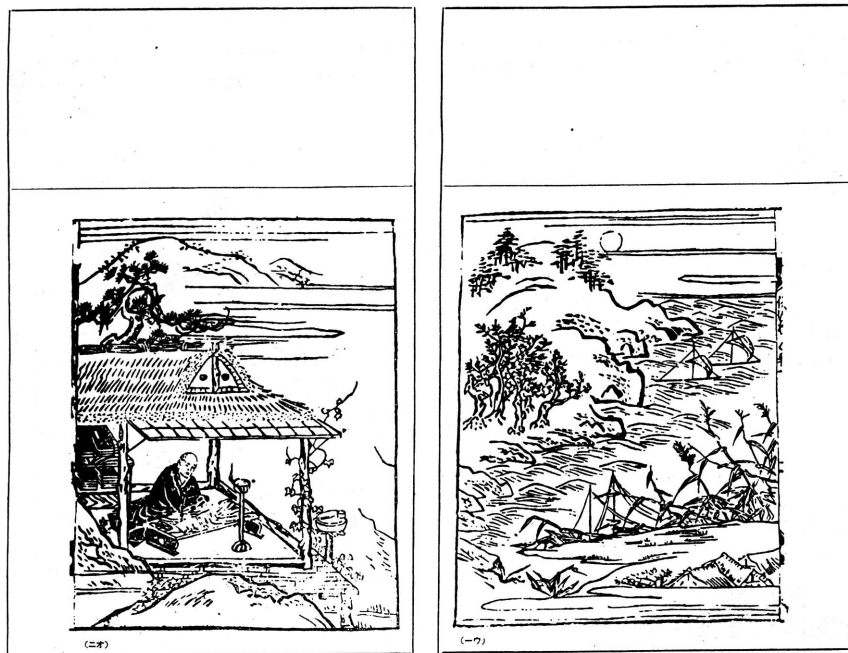


図1 『西鶴俗つれづれ』の口絵

(図二)。そもそも『徒然草』に挿絵を付したのは、松永貞徳の注釈書『慰草』(慶安五年刊)が最初で^③、段ごとに挿絵が付いているこの書は兼好法師の肖像画を序段(図三)、13段(図四)、137段(図五)にそれぞれ一枚ずつ、三枚も掲載されています。それぞれ硯に向かって執筆を続けたり、灯火の下で読書に耽って「見ぬ世の友」と交わったり、月などの自然美を觀賞したりした兼好法師の姿を見せています。しかし、その後『慰草』を模倣して作られた絵入本の多くでは、挿絵の数を大きく減らし、兼好の肖像画を省略したり、三枚の絵を一つにまとめ、序段の挿絵として掲載したりしています。『西鶴俗つれづれ』の口絵の基になった『徒然草吟和抄』もその一例です。三十五枚の挿絵を載せているだけのこの書では、灯火、本棚の本、机、硯、庭の手水という身の回りの道具も、松、月、山などの自然美も皆一つの見開きの挿絵にまとめ入れられ、『徒然草』の著者のあらゆる面が一瞥しただけで印象付けられるようにされて

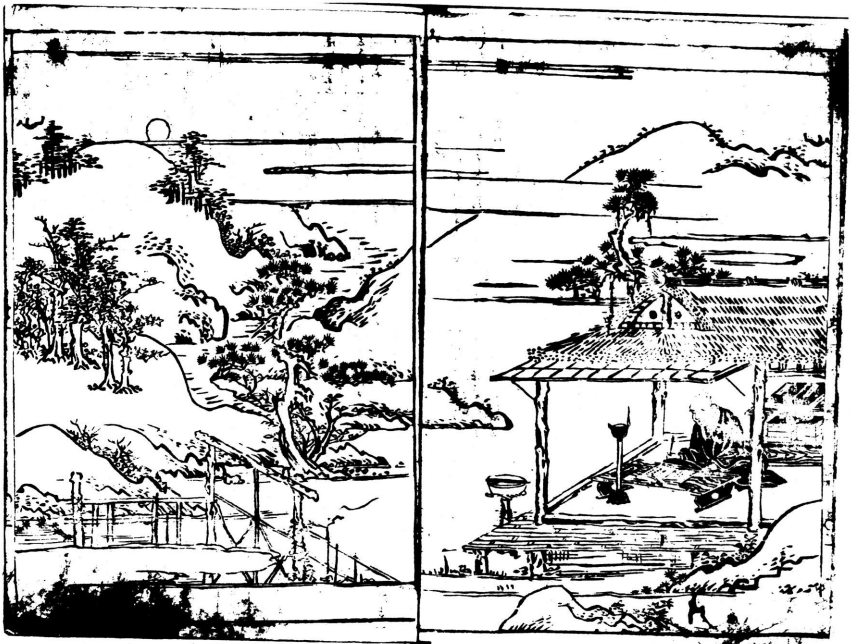


図2 『頭書絵入徒然草吟和抄』の口絵

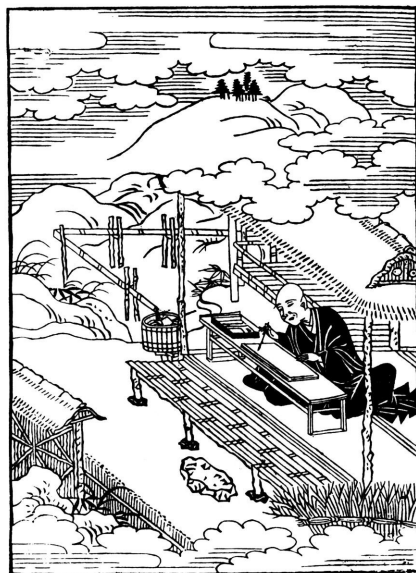


図3 『慰草』の口絵



図4 『慰草』13段の挿絵

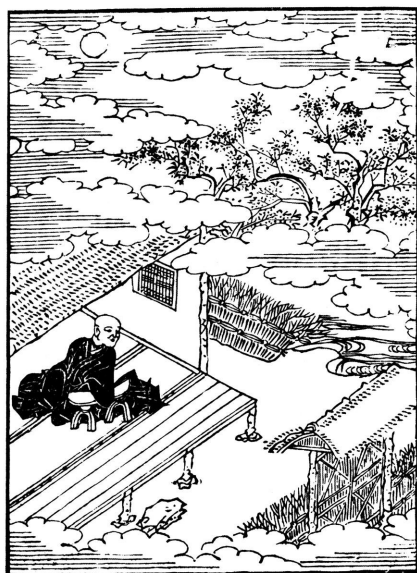


図5 『慰草』137段の挿絵

います。『西鶴俗つれづれ』の出版者はその絵を借りて、裏返しにした物をほとんどそのまま写しているのです。ただし兼好法師と西鶴との違いがすぐ読者にわかるように、庵に座っている人物の前に広がる景色を大きく替えたのです。京都周辺の山に籠もった兼好法師と違い、その絵の中の西鶴は芦の茂った、船の帆や人家が見える難波の浦、すなわち新興都市大阪を象徴する風景を見下ろしているのです。版元が書いたこの挿絵の序文は『徒然草』の137段や

57段の有名な文を踏まえ、西鶴について「心の海が広く、筆の林世にしげき」。。。」かの法師の心におさおさ劣るまじ」と読者に強く訴え、西鶴が新しい兼好法師であったことを意識させようとしています。

この西鶴を称賛した文は広告としての役割を持っていたということを考慮する必要もあるかもしれませんが、『こゝろ葉』（宝永三年-1706）などに載った、西鶴の死後数年後に出た他の人の評価と並び、当時の西鶴の理解を語る貴重な資料であります。同時にそれまでよく論じられてきた西鶴と『源氏物語』の関係だけではなく、今までそれほど注目されなかった『徒然草』との関係にも注目する重要性を語っているものと思います。今までにも西鶴の作品における『徒然草』の引用や西鶴の世界観、特に「世の人心」の捉え方に及ばされた影響などについて市川光彦・谷脇理史・広島進氏などのすぐれた論文が書かれています^④。ここではその先行研究を参考にしながら、「古典としての教養」という大きなテーマとも関連させて、小説の表現や構想、すなわち「ものを書く」行為について、西鶴が『徒然草』からどのようなことを学んだかという問題を取り上げて少々考えてみたいと思います。

2 「文車の文、塵塚の塵」

西鶴自身の認識が『西鶴俗つれづれ』の版元の理解と一致しているかどうかを確かめるために西鶴の俳諧の書を紐解くと、談林俳諧全般にも見られるように『徒然草』の句に基づいた連想がかなり窺われます。この現象は西鶴だけに限らず、談林俳諧全般に見られることですが、西鶴の場合は特に「多くても見苦しからぬは文車の文、塵塚の塵」という72段の文章を引いた句が目立ちます。特に『大句数』（延宝五年-1677）の次の一連の句が注目に値します。

味噌桶すり鉢水桶もあり
煤払いの宿の塵塚すて兼ねて
やうありさうな文車の文

早飛脚とぶがごとくにあがり口

稲葉を乱したる北国の風

（『大句数』第十卷）

この一連の句は『徒然草』の72段と19段から発想されると思われます。最初の三句は72段で、見苦しいほど多くの道具が詰まった家から、一年積もった塵を塚に集める大掃除の景色に移り、『徒然草』に基づいた塚の縁語の「^{ふみ}文」に連想が流れます。その「^{ふみ}文」という言葉は書籍とも、古い手紙とも解釈できますが、前の句からの大晦日・正月と連想も働き、『徒然草』19段の正月の描写を媒介とし、急ぎの手紙を持って走る飛脚のシーンに移ります。最後の句は、この急用は天変による米相場の値上がりの知らせだとはっきりわかります。この一連の五句で描かれる世界は狭い家の場からスタートして、国と国を繋ぐ道路や田畑まで広がり、西鶴が町人物で描く町人の経済生活の世界に酷似した場面になっていきます。もちろん矢数俳諧は付け句を連ねるのが目的で、文学を考える場では全くありませんでした。当日すでに千余句を詠んできた西鶴の発想が次第に連想だけに頼っていき、それぞれの要素の関係が必ずしもはっきり表されなくなっています。しかしその矢継ぎ早な連想の中で「^{ふみ}文」という字のもつ雅と俗の両義性が生かされ、みやびな古典書籍の世界が、塵という連想を通じて、早飛脚の手紙で代表されるような近世町人の実生活を写した実用の書類に関係付けられ、一つの不可分の結合をなしています。矢数俳諧の段階で後年の小説の世界がすでに潜在的に構想されつつあったと考えられます。

その後、塵と^{ふみ}文のイメージが俳諧から浮世草子に受け継がれ、作品のあちらこちらに見られるようになります。『好色一代男』の冒頭の章の主人公の描写の部分にその72段の言葉がパロディーとして用いられ、世之介が収集している姿絵が「おほくは文車もみぐるしう」と形容されています。第二の章にも、『太平記』に載っている、兼好法師が高師直に頼まれて代筆した艶書の説話が振られていると言われます。同じく第二章の話の内容と少々ずれた発想の、謎

めいた挿絵（図六）についても、まだ検討を要しますが、『徒然草』と無関係ではないようです。高い縁側の上に座している世之介が手習いの道具が載る机に背を向け、脇息であるかのように欄干に凭れ、艶書を手にして女中に渡そうとしている姿勢は兼好法師の姿を仄めかすつもりで描かれたのではないかと思います。そして『好色一代男』の構想全体を紹介している跋文では、「月には聞かしても余所には漏れぬ昔の文枕」という表現が用いられ、読書・執筆・自然美の観賞などからなる兼好法師の風流な隠者生活を連想させます。文枕に使用される紙屑や反故といったような、価値のない「転合書」は案外に酌みがない「人の心」を面白く、おかしく認識させる力がある、貴重なものであると読者に訴えます。『徒然草』の俳諧化の発想は谷脇理史先生が分析した『源氏物語』の螢の巻の物語論から継いだ小説観と多く重なる所があります。⁵⁾西鶴は三教一致や勸善懲悪の思想をもっぱらとした当時の『源氏物語』の注釈書を読んでいたと思いますが、自分自身は宗因流の俳諧に培った自由の精神をもって理解していたと思われます。同じように『徒然草』についても、その注釈書の理解を超



図6 『好色一代男』巻1の第2章の挿絵（天和2年-1682）

え、兼好法師の大胆な逆説をそのまま受け入れ、伝統の文学観に基づいた新しい時代の文学の基礎を築いていったのです。その塵と^{みみ}文の連想に基づいた文学観は西鶴の作者生活を貫き、『万の文反古』という、未刊に終わった書簡体小説の序文で典型的な形として現れています。有名な文章だけに谷脇理史先生などの解釈が行われているのでここでは割愛します。

3 「見ぬ世の友」と「見る世の友」

『好色一代男』に二年遅れて出版された『諸艶大鑑』では、『好色一代男』と同じように冒頭にも末尾にも『徒然草』に関連した表現が使われ、その強い影響の下に置かれているようです。二行しかない短い跋文は次の通りです。

右全部八冊世の慰草をなにがなと尋ねて、忍ぶ草、靡き草、皆恋草、これを集め、命開板者也。

この中の「慰草」という言葉は『西鶴対訳全集』の注釈で説いている通り、読者の娯楽になるはずの書物を意味する表現ですが、『徒然草』の注釈書『慰草』の題名でもあります。付け合いの書『俳諧類船集』（延宝四年－1676）の「慰み」という項目に「ひとり灯火のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる」という13段の文章を引用しています^⑥。他の「草」の字が入っている「忍ぶ草」・「靡き草」・「恋草」の言葉も皆『徒然草』を連想させる機能が備わっていると思われます。貞徳の場合は、兼好法師が古典を読んで慰みを求めたように、新しい古典である『徒然草』を読むのを楽しみ、さまざまな事に触れながら、自由な解釈を行い、読者にその面白さを味わわせようとしています。西鶴になると、兼好の言葉を逆転させ、「見ぬ世の友」ではなく、「見る世の友」として、読者の慰めとなるような作品を提供しています。同じことは冒頭の章の結びにもより詳しく語られています。

見及び、聞き伝えしは、松の葉の塵なれば、祇園箒の跡までも、心の綺麗なることばかりあらはし、よしなきことは、はき捨^{すて}る物にぞ。京の帥仲間、末社、卸^{おろせ}のかしらまでも、是は見る世の友に、ならばなるべし。

ここには、13段以外に序段・72段も意味を転換して引用しています。密度の高い俳文なので、詳しい考察を省略して、ただこの表現から読み取れる作者の描写にだけ簡単に触れるに止めますが、筆に随ってよしなしごとを書いていく兼好法師の受動的な態度と対照的に、ここでは小説家の積極的な資料の収集と選択の仕事が描かれているのです。「見ぬ世」に耽る中世的な世間離れの文学に対して、ここでは読者を意識に置いて、現実世界の認識に基づく、近世の商業的出版文学が紹介されています。そうはいつでも、「見る世の友」という表現はただ「見ぬ世の友」の逆転だけではありません。職業文学の賛美だけでもありません。この両方の表現には文学が持っている、物を伝える力が表現されています。「見ぬ世の友」とは、死んだ人の姿を再現させる力、「見る世の友」とは、世の人の心の酌みがたい現世を認識させまざまざと見えるようにする力のことで、共通点があるのです。しかし近世の職業作者は、ただ硯に向かって、心に浮かぶものを書き続けるだけではありません。塵塚の塵のようにはびこる世間話・物語・噂をはじめとして、あらゆる会話や通信文など日常生活のジャンルまでを集めて小説に入れ、面白くおかしく整理・構成し、大都会の取り留めのない騒音を、面白く、意味深長な文学に変えるのが小説家の使命だと西鶴は思っていたらしいのです。作者の役割に触れている『西鶴諸国ばなし』・『武家義理物語』・『武道伝来記』・『本朝二十不孝』・『西鶴置土産』の序文は皆「聞き伝う」や「集む」という動詞を使っていますが、それは浮世草子の作者のこういう姿をはっきりと浮き彫りにしています。一方、作品の中では、世之介・世伝・伴山などといったようなワキ役の人物が作者の代役として登場し、小説家が果たす役割を象徴的に表しています。

4 「虚空よく物を容る」

西鶴における『徒然草』の影響は個人的な趣味のレベルを超えたもので、大きな時代の流れの中に置くべきものです。慶長年代の最初の版本を始めとして『徒然草』は江戸時代初期の文化の中心的な存在になり、数知れぬ出版物や口頭講釈を生み、仮名草子にも重大な影響を与えました。当時逐次出版される注釈書や模倣作品が儒仏論などのさまざまな議論の場にもなっていたということは最近注目されています。しかし『徒然草』を儒学や仏教から離して和歌の感覚的な伝統の中で捉えようとする俳諧系の注釈者さえも、勸善懲惡の教訓的な読み方を完全に脱することができなかったという事実も指摘されています。『徒然草』の形態を模倣した如偏子の『可笑記』（寛永十九年－1642）はその教訓的な詠み方の典型的な一例です。その題を借りて、『新可笑記』（元禄元年－1688）と言う武家物を出版した西鶴は、序文で『可笑記』を批判しています。

むかし淀の川水を硯に移して、人の見るために道理を書きつづけ、是を可笑記として残されし。誰かわらふべき物にあらず。

すなわち、西鶴は『可笑記』の『徒然草』理解を否定して道理や教訓を排し、読者を笑わせることができるような滑稽文学を目指していると言っています。しかし非難されるのはあくまで「道理」であり、「淀の川水を硯に移す」という実生活を描くという意図自体を批判するものではありません。そして「明けくれ世間の慰み草を集め」、「知恵袋のちいさき」作者は道理を説き、教訓を与える資格がまったくない人物として描写されています。遺稿集『西鶴織留』（元禄七年－1694）の序文もそれに近い表現を使用しています。

風はかたちなふして松にひびき、花はいろあつて物いはず。まなこにさへぎることはこころにうかび、おもふ事はねば腹がふくるといふはむ

かし。やつがれがちいさき腹してつたなき口をあけて、世間のよしなしごとを筆につづけて、是を世の人心と名づけ、難波のくれは鳥織留のものならし。

『徒然草』の序段と19段に加えて235段の「鏡に色かたちなき故に万のかけ来りてうつる。鏡に色かたちあらましかば、うつらざらまし。虚空よく物を容る」という思想に類似した表現もこの序文に織り込まれています。仏教や老荘思想に基づくこの思想を西鶴は文学者なりに文学を書く行為に適用し、自分自身の文学観を表明しています。浮世草紙の世界が成り立つためには小説家はその心を空にし、あらゆる支配的な価値体系から自由にならなければなりません。そして、さまざまな「世の人心」、武家の義理や自分の出身である町人の倫理や、また他のどの価値体系も、もろこしから渡った「くれは鳥」のような異端者の立場に立って観察することが必要です。それまで『徒然草』を模倣した多くの仮名草紙の作者は随筆の枠組みを出ず、しかも兼好法師のような自由自在の境界にまで達せなかったので、教訓的な面が強く残る傾向がありました。西鶴は『徒然草』に倣いながら、作者の心を中心に置いた随筆の形を脱し、『徒然草』に多い小説的な要素を生かしながら、新しい、作者がほとんど顔を見せない小説の形を獲得したと言えます。好色物、武家物、町人物は、好色、武家、町人のそれぞれの世界を登場させ、それぞれの価値体系を現しています。兼好法師が207段で大福長者という人物に発言権を与え、儉約の論理を述べさせた上で、それを正面から否定せず、むしろその内在の矛盾を浮き彫りにさせ、相対化していくという方法を取っているのと同じように、西鶴もそれぞれの短編集にさまざまな論理や意見を容れて、相対化し、小説の材料に使うことに成功したと言えます。

5 結び

「人は実あって、偽りおほし。その心は本虚しんにして物に応じて跡なし」とい

う『日本永代蔵』の始まりの文や「それ人間の一心、万人替われることなし」という『武家義理物語』の序文が表すように、さまざまな身分や職業に分かれ、それぞれの環境に支配されている人間の心は元々一つであり、作者のそうした虚空の心にも通じ、それが小説という文学表現を可能とする土台になっています。しかし西鶴が描く作者の態度は宗教や思想の次元ではなく、あくまでも文芸の次元で成し遂げられた心境で、西鶴とその読者の多くが俳諧という運動のなかで培ってきた古典的な教養と遊びの精神を基にしたものです。好色の世界を取り上げた最初の浮世草子である『好色一代男』は虚構の要素が濃い作品として知られています。『徒然草』の虚構性と遊びの精神も、研究者達が強調しているところです。江戸時代初期を通じて「見ぬ世の友」と親しまれていた兼好とその随筆は新興作者である西鶴にとって新しい文学へ導く「見る世の友」となりえたと言えましょう。

松永貞徳は『慰草』の中で兼好法師を称賛して「古き草紙をばたれも見る事ながら、かやうにあたらしくとりなして書きつらねむ人は、ちかき世にあるべしともおぼえはべらず。」と言っています。同じ称賛は西鶴にも与えられましょう。兼好法師が平安時代の古典を読んで以前と次元の異なった文学を創造したのと同じように、西鶴も当時非常に親しまれ広く読まれていた『徒然草』を基にして斬新な文芸観と方法を獲得しえたと言えるのではないのでしょうか。

【註】

- ①京都の田中庄兵衛・大阪の八尾甚左衛門の相版。なお、田中庄兵衛は『徒然草諸抄大成』（貞享五年-1688）の版元の一人です。
- ②川勝五郎右衛門（京）・帯屋甚右衛門（大坂）の相版。別題『頭書絵入徒然草吟和抄』『頭書徒然草絵抄』。
- ③齊藤彰「徒然草版本の挿絵氏」（一）『学苑』2002年1月。
- ④市川光彦『西鶴のなかの兼好 序一『徒然草』享受個人史への出発』『国語国文学論集・松村博司先生喜寿記念』（1986年）所収。谷脇理史「『徒然草』と西鶴の町人物」、『近世文芸への視座』新典社（1999年）所収。広島進「『世の人心』と『徒然草』』『西鶴とその周辺』勉誠社（1991年）所収。
- ⑤「『源氏物語』の受容と西鶴—文芸意識の基底ををなすもの—」『西鶴—研究と批評』若草書房（1997年）所収。

*** 討議要旨**

中嶋隆氏は、兼好法師が西鶴に与えた精神的な影響について尋ねた。発表者は、西鶴にとって『徒然草』は特別なものであり、小説を書く時の精神世界への憧れ、異次元のものという点で影響を受けていると答えた。

鈴木淳氏は①「近世文学は『徒然草』から始まったのではないか？」という動向から、この研究を行ったのか、②西鶴は『源氏物語』『枕草子』と比べ『徒然草』をどう見ているかと尋ねた。発表者は、①西鶴の序文にしばしば引用されている『徒然草』を研究することが、西鶴の理解になると思った、②和歌と俳諧という同じ伝統の流れとしてみていると述べた。

江口季好氏は、①汎中世的なものが近世へどうつながるか、②ドイツ、フランスにおける近松や西鶴の状況と、西鶴や近松のような相関的感覚はないと言われている現代日本との関係について尋ねた。発表者は、フランスでは近代と現代の言葉の違いはなく、また、翻訳物も時代による言葉の違いがないので、日本人が古典を読むより読みやすいと述べた。また、『徒然草』は元禄の人たちにとって新鮮なものであったとも述べた。

ロバート・キャンベル氏は、西鶴の中の『徒然草』のとらえ方を尋ね、発表者は肯定的にとらえていると答えた。